

# 2016年度LET関西支部秋季研究大会

2016年10月8日（土）

同志社女子大学（今出川キャンパス）

## 基調講演

Incorporating CLIL in English Teaching in Japan

和泉 伸一 先生（上智大学外国語学部）



### <講演概要>

本講演では、CLIL (Content and Language Integrated Learning: 内容言語統合型学習) の考え方を紹介しつつ、それがいかに日本の検定教科書を使った授業に生かしていけるのかを具体的な活動を通して紹介したい。CLILとは、言語学習それだけを遊離させて文法や語彙を指導するのではなく、そこで伝えらえる内容をしっかりと理解し考えることを大切にする教え方である。そのため、活動を行う際にも教科書に登場する言語項目とそこで扱われている話題をいかに融合させて活動を考案し進めていくかが鍵となる。CLILは小・中・高・大学のどのレベルでも応用可能な考え方だが、本講演では特に中学校の活動を中心に話を進めていきたい。

(講演は英語で行なわれます)

### <講師略歴>

上智大学外国語学部英語学科 学科長、教授。ジョージタウン大学博士課程修了。言語学博士。南イリノイ大学東アジア言語文化学科日本語講師、ジョージタウン大学言語学学科講師、ハワイ大学マノア校客員研究員、オークランド大学客員研究員を経て現職。専門は第二言語習得研究と英語教育。『フォーカス・オン・フォームとCLILの英語授業』（2016年、アルク）、『「フォーカス・オン・フォーム」を取り入れた新しい英語教育』（2009年、大修館）、『CLIL（内容言語統合型学習）：上智大学外国語教育の新たなる挑戦—第1巻 原理と方法、第2巻 実践編、第3巻 教材編』（共著、2011年、2012年、2016年、上智大学出版）など、その他著書・論文多数。中学校用英語検定教科書『New Horizon: English Course 1, 2, 3』（東京書籍）編集委員、*Language Teaching Research, Studies in Second Language Acquisition*などの編集（試問）委員。

<http://www.let-kansai.org/>

# シンポジウム ～学習者の学びについて考える～

パネリスト： 八島 智子 先生 (関西大学)  
Stephen Ryan 先生 (早稲田大学)  
吉田 達弘 先生 (兵庫教育大学)



指定討論者：新多 了 先生 (名古屋学院大学)

## 八島 智子 先生



### Willingness to Communicate (WTC) から見る学習者心理

Willingness to Communicate (WTC) は、「学習者にとって英語でコミュニケーションをするというのはいかに複雑な作業なのか」ということを教えてくれる概念である。WTC（自発的にコミュニケーションを開始する傾向）には、不安・内向性などの性格要因、状況・相手などの社会的要因、文化的規範など多様な要因が絡む。第二言語でのWTCとなると、さらにL2習熟度や学習動機、自信なども加わり一層複雑化する。学習者の全体傾向に注目した初期の数量的な研究に加えて、最近では、教室で、教師の問かけや他者との関係性のなかで刻々と変化する“dynamic”で“situated”なWTCに注目した質的研究も増えている。本発表では、英語の授業での介入型事例研究を紹介しつつ、英語学習者の発話量の差はどのように生まれるのかを提示したい。また日本の学習者のWTCを考える意義を論じる。

【プロフィール】 関西大学外国語学部・大学院外国語教育学研究科教授。博士（文化科学、岡山大学）。専門は応用言語学と異文化間コミュニケーション論。

## Stephen Ryan 先生



### Motivation: What's the point?

In recent years, there has been a huge surge in research into the motivation to learn a foreign language, with Japan-based research being prominent in this development. Unfortunately, much of the research conducted in Japanese educational settings, particularly in connection to the learning of English, paints a broadly negative picture based around issues of demotivation. In this talk, I intend to challenge that negative consensus. First I will present an overview of some of the key ideas emerging from the new wave of motivation research, and then, based on an exploration of concepts drawn from positive psychology, I will go on to reframe language learning motivation in a more optimistic, educationally friendly light.

【Profile】 A professor in the School of Culture, Media and Society at Waseda University, Tokyo. His research and publications cover various aspects of psychology in language learning, with his most recent books being *The Psychology of the Language Learner Revisited* (co-authored with Zoltán Dörnyei) and *Exploring Psychology in Language Learning and Teaching*, co-authored with Marion Williams and Sarah Mercer (Oxford University Press)

## 吉田 達弘 先生



### 社会文化的理論からみた学習者の学び：学びの種はインタラクションの中にあるのか？

社会文化的理論(Sociocultural Theory, 以下、SCT)は、学習者同士、あるいは、学習者と教師とのインタラクションにこそ、学びや発達の源泉があると主張する。しかし、従来からの言語学習研究（例えば、「相互作用仮説」）も、インタラクションに対して、言語学習における一定の役割を与えてきたわけで、SCTと従来の言語教育研究の間で、学びのとらえ方が、どのように異なるのかが、わかりにくいという声も聞かれる。そこで、本発表では、SCTに基づいて英語授業を分析し、教師の段階的支援、意味の交渉、模倣など通じて、学習者がインタラクションの中で言語能力を発達させているプロセスを検討したい。

【プロフィール】 兵庫教育大学学校教育研究科教授。専門は英語教育学。社会文化的理論を基盤にし、教室での英語授業・学習、および、英語教師教育について研究している。

## 新多 了 先生



【プロフィール】 名古屋学院大学外国語学部准教授。英国ウォーリック大学大学院応用言語学研究センター修士課程および博士課程修了（PhD in Applied Linguistics）。近著に『はじめての第二言語習得論講義—英語学習への複眼的アプローチ』（大修館書店）がある。